

# LEADERS NOW!

## 文化祭でオリジナルのUSBメモリーを販売

高等部3年生が企画デザイン

●関西大学高等部3年生  
松谷果歩さん 野口夏希さん  
服部紗弓さん 坂本奈津希さん

9月13と14日、高槻ミュージックキャンパスで開催された関西大学中等部・高等部の文化祭に、今年は制服型のオリジナルUSBメモリーが販売され、人気を呼んだ。企業の協力を得て企画・販売を行ったのは、松谷果歩さん、野口夏希さんたち4人を中心にした高等部3年B組の有志だ。

合唱、演劇、クラブや教科の展示・発表、模擬店など、多彩な出展で大いににぎわった関西大学中等部・高等部の文化祭。3年B組有志は北館1階と東館12階で、高等部の制服姿のオリジナルUSBメモリーを販売し、完売するほどの成功を収めた。リーダーの松谷果歩さんと野口夏希さん、サブリーダーの服部紗弓さんと坂本奈津希さんを中心に約20人が、デザインや業者との価格交渉、当日の販売まで、すべて自分たちの力で行った。

販売したUSBメモリーは男子と女子の2バージョンあり、各8ギガバイトで1個1500円。デザインの可愛さと、上着の襟から前襟につながる白いステッチのラインといった細部まで再現した完成度の高さが、在校生や保護者に好評で、男子は即日完売、女子は男子より生産量を増やしたため2日目昼に完売した。

企画のスタートは7月。ヒントになったのは関西大学商学部の荒木孝治教授のゼミが山崎製パン株式会社と同社の人気商品「ランチパック」の新製品を共同開発したことだった。「商学部への進学を考えています。大学生からランチパックのプレゼンを聞いて、自分も企業とのコラボに挑戦してみたいと思いました」と松谷さんは話す。

先生たちの紹介で、事務用品や卒業記念品製作を扱う企業の協力を得ることができ、デザイン、仕入れ値、数量を打ち合わせた。交渉役の中心を務めたのは野口さん。「できるだけ安く売りたい、無理を言って底値で出してもらいました」

夏休みも明け、サンプルが上がってくると、休み時間も自然と文化祭の相談でクラスが盛り上がった。当日の販売は2箇所、しかも販売を担う生徒はそれぞれさまざまな予定がある。一人一人の都合



高等部3年B組の有志により企画・販売された制服型のオリジナルUSBメモリー



を確認し、名前・担当・時間などが一目でわかるシフト表にまとめたのが服部さん。「得意な作業だから楽しかったです。高校1年生からエクセルの表作成は授業で習います。本校の生徒にとってはUSBメモリーは必需品です」と話す。

製品の出来上がりには自信があったが、赤字が出ないだけの数量を売ることができると、事前の不安は大きかった。そこで、企業のアドバイスを参考に、2個セットで購入の場合は割引価格で販売するなど、販売方法も工夫して当日に備えた。

そんな不安の中で、「絶対全部売れる自信があった」と強気だったのが、当日の販売において巧みなセールストークで大活躍した坂本さん。「毎日受験勉強が中心の生活の中で、みんなで協力してできることが楽しかった。お客さんが商品を見て可愛いと言ってくれるのがうれしかった」と振り返る。

それぞれの個性を發揮して協力し、企業も巻き込んで、自分たちで考え実行するという貴重な体験は、彼女らにとって今後の大きな糧になるだろう。関西大学中等部・高等部の文化祭はまだ今年で4年目。3年B組の体験は次の学年へと受け継がれ、新たな伝統になっていく。



服部 紗弓さん



坂本 奈津希さん

## 関西ジャズシーンを熱くする若手正統派

在学中からプロとして精力的にライブ活動

●ジャズトランペット奏者  
横尾昌二郎さん —社会学部 2007年卒業—

関西大学Jazz研究会は、ビバップ、ハードバップをコンボで演奏することが中心の音楽同好会。ここで腕を磨き、在学中から頭角を現したトランペット奏者・横尾昌二郎さんは、2009年には第3回神戸ネクストジャズ・コンペティション特別賞も受賞。正統派の若手プレイヤーとして注目を集めている。



関西大学千里山キャンパス誠之館3号館別館内にある会議室。ここが関西大学Jazz研究会のボックスだ。室内にはドラムセットやアップライトのピアノが置かれ、授業やアルバイトの合間などに部員が自由に顔を出し、自主的に練習に励み、時には居合わせたメンバーで即興のセッションを繰り返す。このボックスで腕を磨き、関西のジャズシーンで活躍する卒業生も少なくない。

2007年卒業の横尾さんもその1人。「ジンジャーブレッドボーイズ」、「今西佑介セクステット」、「京都コンポーザーズジャズオーケストラ」などのバンドメンバーとして活動するほか、京阪神のジャズクラブを中心に、さまざまな演奏者と共演し精力的にライブを行う注目の若手正統派ジャズトランペット奏者だ。「大学時代が一番練習しました。クリフォード・ブラウン、リー・モーガン、マイルス・デイヴィスなど巨匠たちの音を聴いて採譜し、コピーする。何度も繰り返し練習すると、次第に自分の中に音が染みこんできて、セッション時に自然とその音が出るようになるのです」

本格的にジャズに触れたのは、中学のブラスバンド部。「押さえるところが3つしかないの簡単そうで、格好良かったから」という理由でトランペットを選んだ。高校は北陽高等学校へ進学。当然、ジャズバンド部に入学。練習に励む傍ら、中学3年から高校卒業まで、関西ジャズ界の雄「アロージャズオーケストラ」がプロデュースする「アローミュージックスクール」で学んだ。中学や高校で親しんだのはビッグバンド形式のジャズだった



横尾 昌二郎  
—よこお しょうじろう

■1984年(昭和59年)、兵庫県生まれ。2003年北陽高等学校、2007年関西大学社会学部卒業。ジャズトランペット奏者。在学中よりプロとしてライブ活動を開始。ジャズバンド「ジンジャーブレッドボーイズ」、「京都コンポーザーズジャズオーケストラ」などに参加。作曲、アレンジも手がける。



▲リリースされたCD

が、関西大学Jazz研究会では少人数で即興性の高いコンボスタイルの演奏を始め、阪急北千里駅前でのJazz研究会ストリートライブ、他大学との共演やジャズパーティへの参加など、活動の幅を次第に広げていった。

転機になったのは大学3年次、Jazz研究会の先輩に誘われて、大阪・谷町9丁目のジャズクラブ「SUB」に出入りするようになったこと。「SUB」のオーナーは重鎮ベーシストの故・西山満さん。横尾さんが面識を得るようになった時には、西山さんはすでに70代だったが、孫ほど年齢が離れた若者との演奏を好み、横尾さんは西山さんとはしばしば一緒にステージに立った。そして、ギャラはわずかだが、プロとしてステージに立つ機会も増えていった。

3年次といえば大学生は就職活動に奔走し始める時期。だが、横尾さんは、プロへの道を決意し、エントリーシート1枚すら書かなかった。「プロでやっていける自信があったわけではないけれど、もうしばらく音楽をやってみようと思った。自然な流れだったような気がします。しかし、卒業後3年ぐらいは悲惨な状況でしたね」

金銭的には恵まれなくても、演奏は楽しかった。面白そうなセッションがあると、スケジュールの許す限り顔を出す。それは今でも変わらない。やがて、横尾さんの実力が認められて、一緒にやろうと声が掛かるようになった。今では月に15本以上のライブをこなす売れっ子プレイヤーだ。また、ビッグバンドのアレンジを提供するなど、編曲家としても頭角を現している。

「できていないことを、毎日1つずつできるようになろうと決めて練習しています。これまでの演奏スタイルにとらわれず、変化していきたい。トランペットは、肉体との関係が深い楽器なので、肺を鍛えるなどフィジカルアプローチも行っています。自分の中で生まれてくる音を瞬時に表現し、場の空気を変えられるようなプレイヤーになりたいですね。オーソドックスなハードバップをベースに、横尾さんは自分なりの新しい音の地平を切り拓こうとしている。



ライブ風景(横尾さん提供)